

『黒い雨』とベトナム戦争

中 谷 い ず み

一、はじめに

『黒い雨』は、『重松日記』との関わりも含め、井伏鱒二の作品の系譜の中で論じられてきました。また原爆文学の系譜においても「平常心」によつて原爆を捉えた新たな作品と評価されるなど、あるカテゴリーにおける通時性の観点から多く議論されてきたように思います。今回の発表では、そのような歴史的編成としての時間ではなく、同時代的文脈という、いわば共時性からこの作品を見ていきたいと考えています。時代との関わりから『黒い雨』を論じた川口隆行は、原水禁運動が「被爆者」を（唯一の被爆国日本）を代表する国民主体として表象したのに対し、『黒い雨』は被害者ゆえに素朴で根深い平和を希求する「庶民」を代弁する作品として受容されたことを指摘しています（『原爆文学という問題領域』創言社、二〇〇八年）。本発表では、この論を踏まえた上で、まず「庶民」の表象が『黒い雨』というテクストの中で

どのように構成されているかを分析し、作品が発表された一九六五年前後のベトナム戦争をめぐる語りと並べてみることで、作品の同時代性について考えてみたいと思います。なお、『黒い雨』の引用は読みやすさを優先し、新潮文庫版（二〇〇三年五月改版）に依拠しました。

二、「庶民」の表象、あるいは物語内の上／下

『黒い雨』にはさまざまな儀式や慣習が描かれています。それが秩序立った日常の世界と原爆投下によつて秩序が破壊された世界とを対比的に示すものであることは言うまでもないでしょう。しかし効果はそれだけではありません。例えばジョン・トリートは、それらが自然化されて語られていることを指摘した上で、そうした「よい」自然界の内部に起きた「わるい」出来事として原爆の惨状を位置づけることで、「ヒロシマ」を脱歴史化し普遍化したと指摘しています（『グラウンド・ゼロを書く』法政大学出版社、

二〇一〇年)。ジョン・トリートはこれを、重松を家長とする家父长制家族イデオロギーの延長と見なしていますが、その指摘通り、テクストに書き込まれた儀式や慣習の自然化と家父长制イデオロギーは繋がっているといえるでしょう。そしてこの点をもう少し発展させるならば、儀式や慣習への依拠という共同体主義や家父长制イデオロギーが、「庶民」の代表としての重松像の形成に一役買っていると考えられるのです。

もう少し詳しく見ていくことにしましょう。『黒い雨』には、儀式や慣習、共同体規範や先人の知恵といったものと生活との関係が書き込まれています。例えば重松は、「芒種」に戸主が行う百姓道具の整理や、その翌々日の「虫供養」など、季節の行事をきちんとこなしていきます。また妻シゲ子が記した「広島にて戦時下に於ける食生活」の中には、戦争に備えて「燐寸と塩」を買いためるなど、祖母から聞かされていた知恵を活かしていたことや、防空壕に避難する際の食物の風呂敷に「祖先の名前を書き並べた書類も入れて」いたことなども記されています。更に、被爆後の症状で働けなくなつた重松や、彼の友人の庄吉、浅二郎らの体には散歩がよいのですが、「散歩は浅薄な振舞」と見なす村の「伝統的な風習」のために、昼間からふらふらして「結構な御身分」だと言われてしまいます。そのため彼らは資本を投じて鯉を飼い、鯉釣りを仕事や事業にすることで村の人びとから何も言われないようにするのですが、これはつまり「伝統的な風習」を否定したり、変えようとしたりするのではなく、自分たちの行為の意味をずらすことで「風習」との折り合いをつけていく姿勢を示すものでもあります。

こうして見ていくと、重松一家は、慣習や風習など先人から受け継ぐ規範に従順な存在として描かれているといえるでしょう。このような重松一家の姿と同時に、テクストには〈お上と庶民〉とでもいへば構図が提示されています。例えば、重松の子どもの頃に優良通送人として「大臣」から表彰されたという類五郎爺さんのエピソードでは、「郵便ホイ、また来たホイ、お上の御用で、また来たホイ」「お上の御用で、エッサツサ」という囃子ことばが語られています。また、重松の曾祖父が中央の「役人」にケンボナシの実を贈つた返礼に受け取つた、当時では珍しいインク書きの手紙が大切に保管されていたエピソードも語られています。これは曾祖父が、新しさへの憧れとともに、その新しさを所有し得る「お上」への憧れや敬意、従順さを有していたであろうことを思わせるものといえるでしょう。そしてこうした憧れを含む上下関係と同時に、「上」に支配管理される「下」という構図も示されています。

例えばシゲ子の記録には、戦時は「統制令のもと」で知らせや通達が「行き渡る組織」になつていたことや、国定教科書の宮沢賢治の詩の「一日に玄米四合ト……」が「三合ト……」と改訂されていたことを批判する発言をしたために「流言飛語は固く慎め」と「その筋に呼び出されて」叱られた人がいたことなどが記されています。また自分たちの食事の記述に加えて、「大東亜共栄圏の諸国の使臣や外務省の外郭団体の人たちが」宿泊していたという「帝国ホテル」ではどんな献立になつていたのであるかという言葉が書かれるなど、上下の断絶が強調され、目にするのもない「上」からの暴力を受ける「下」の者たち——重松ら「中流階

級」も含めた下ということになります——という構図が強調されていくのです。もちろんこの構図は前半のみに見られるものではありません。原爆投下から数日後、工場長の指示で石炭配給の嘆願に行った重松は、「下」の者では何も決定できない場面に直面したり、またそれ以前の軍の横暴振りを思い起したりと、テクストは「上」の都合によって「下」が翻弄されてきたことを前景化していきます。

このテクストに埋め込まれた上下の断絶は、従順さにおいて先祖の頃から語りの今にいたるまで何も変わらない重松たちが、「上」の横暴に翻弄されるという筋立てを用意してしまうものでもありません。更にその筋立ては、上空から投下された原爆がその下に住む人びとの世界を阿鼻叫喚の地獄に陥れるという構図と重なるために、より違和感のないものに見え、上から降ってくる厄災に苦しめられる従順な人びとの物語という側面を補強します。

た。もちろん、重松が自分の置かれた状況をお上の所為だと直接に語る場面はありません。彼はむしろヒトラーを批判した正宗白鳥をあげて胸をすくようだと思っていたのに、軍需工場にいるうちにヒトラーが勝てばいいと思うようになり、原爆でまた手のひらを返したようになったという自分の矛盾に言及しています。つまり重松は、確固たる思想や特定のイデオロギーを持たず、社会の規範から大きく逸脱することもないままに日常を過ごしていた人物として形象されているのです。だからこそ「お上」と「庶民」を分断するこのテクストは、「上」から落ちてきた不幸——戦争や原爆の苦しみ——に苦しむ善良な「庶民」という構図を生み出してしまおうのです。

三、ベトナム戦争と『黒い雨』

『黒い雨』は『新潮』一九六五年一月〜一九六六年九月号に連載され(連載当初の題名が「姪の結婚」だったことはよく知られています)、一九六六年一〇月に単行本として刊行されました。実はこの時期はベトナム戦争報道が盛んになった時期でもあります。

一九六四年八月のトンキン湾事件を契機にアメリカが全面北爆を始めるのが一九六五年二月のことで、朝日新聞のベトナム報道件数を調べた木下和寛によれば、一九六五年の一年間で四五〇九件もあり、これは一九五四年から六〇年までの七年間の件数(九一九件)の五倍にあたるといえます(『メディアは戦争にどうかかわってきたか』朝日新聞社、二〇〇五年)。この前後にはテレビでもベトナム戦争関連の特番が続々と制作され、また一九六五年刊行のものだけでも、岡村昭彦『南ヴェトナム戦争従軍記』(岩波新書、一九六五年一月)、大森実監修『泥と炎のインドシナ』(毎日新聞社、一九六五年三月)、開高健『ベトナム戦記』(朝日新聞社、一九六五年三月)、小山房二『南ベトナムの崩壊』(筑摩書房、一九六五年五月)などのルポルタージュがあげられます。井伏自身も「丁度ベトナム戦争が盛んな頃で、戦争反対の気持も含めて、極力事実を尊重してルポルタージュとして書いた」(伴俊彦「井伏さんから聞いたこと その十一」『井伏鱒二全集第十三巻 月報13』筑摩書房、一九七五年四月)と述べており、その言葉は、例えば岡村昭彦のルポルタージュの次のような記述と『黒い雨』の被爆時の描写を並べてみると頷けます。

戦車の中には、つぎつぎと負傷者が担ぎこまれ、足を貫通された兵隊が、私の首にすがりついた。もはや写真どころではなかった。死体の上に死体が積まれ、その上に負傷者がころがされた。

タンカに乗せられたアメリカ軍の中尉の綺麗にヒゲを剃った顔には、もう血の色はなかった。眼鏡は飛びさり、胸からふきだした血が、金髪を染めていた。すでに白くなくなつたくちびるが、あえぐように、ぱくりと開いた。(岡村昭彦『南ヴェトナム戦争従軍記』)

この境内のわきの往来の人は、みんな灰か埃のようなものを頭から被っていた。血を流していなかったものは一人もない。頭から、顔から、手から、裸体のもは胸から、背中から、腿から、どこからか血を流していた。頬が大きく脹れすぎて巾着のようにだらんと垂らし、両手を幽霊のように前に出して歩いている女もいた。(井伏鱒二『黒い雨』)

このように、場面の時間進行上、内面描写を挟む余地なく戦線で人が死んでいく様子を描いたルポが一九六五年の時点で刊行されていることを踏まえると、『黒い雨』の同時代性というものが見えてくるでしょう。ここでは、一九六五く六六年時点のルポや雑誌言説の幾つかを追うことで、『黒い雨』が発表された時代を見ていきたいと思えます。

この時期、既に、ベトナム戦争は複雑な様相を呈しており、ゴ・

ジン・ジェム政権の圧政、クーデターなどによる度重なる政権変転とアメリカの介入、そしてアメリカを主軸とする自由主義陣営のアジア戦略と中国の反発、残存するフランスの影響力、資本主義対共産主義というイデオロギー対立、そしてベトナム国内における民族主義や宗教弾圧など問題が交錯していました。その複雑な事態を背景にしつつ、ベトナムの人びとが語られるわけですが、その際に言及される存在の一つが「農民」でした。例えば開高健は次のような発言をしています。

あの国は問題が非常にこみ入つていてむずかしい。ただ一つ、私が言いたいことがあるのですが、南ヴェトナムというのは、国土および人口の八割から八割五部が農村であり、農民であるということなんで、コミュニストであろうが、民族共産主義であろうが、あるいは自由主義者であろうが、あるいはゴ・ジンジェムであろうが、アメリカであろうが、その国をどのような方向にもつていくにもせよ、改革するにはこの農村と農民をつかんだ人間だけが、これをできるのです。

(「8・15記念徹夜討論集会(ティーチ・イン) 戦争と平和を考える 第一部(討論)ヴェトナム問題と日本の進むべき道」『文芸』九月増刊号、一九六五年九月)

国土および人口の八割から八割五分が農村であり、農民である南ベトナムで改革を行おうとすれば、コミュニストであろうが、民族共産主義であろうが、アメリカであろうが、農村と農民をつかむことが鍵になると開高は言います。多数派であるにも関わら

ず「農民」たちは虐げられており、金のある若者たちが逃げるようにパリやニューヨークへ行く一方で、農村の若者たちの多くは南ベトナム政府であれ解放民族戦線であれ、兵隊として戦争に参加せざるを得ないような立場にあること、またこうした状況下で農民たちが解放民族戦線につくのは仕方ないとする論調は、前述の『南ヴェトナム戦争従軍記』『泥と炎のインドシナ』『ベトナム戦記』に共通して見られるものです。例えば『ベトナム戦記』の中では、ベン・キャット基地と一緒にたつた米軍曹長の言葉としてそれが語られています。米軍曹長は「ベトコン」＝「コミニズム」と理解して「この国の貧しい百姓がコミニズムに走るのも当然だと述べるのですが、それに対し開高はそれを誤解と指摘し、「コミニニストは意外に少なくてむしろ民族主義者や自由主義左派グループのほうが多いらしいのだ」と説明しますが、曹長は耳を貸そうとしません。この、解放民族戦線＝「ベトコン」の中の共産主義者の割合が実はあまり高くないということは、前述の「8・15記念徹夜討論集会（ティーチ・イン）戦争と平和を考える 第一部（討論）ヴェトナム問題と日本の進むべき道」の発言者たちにも見られます。つまりこの時期には、共産主義対資本主義というイデオロギー対立に回収できない戦争であるという認識が共有されていたと、ひとまずはいえるでしょう。大森実監修『泥と炎のインドシナ』には次のような記述が見られます。

南ベトナムの大部分の人々はベトナム問題の解決について、何らの意見も、希望ももっていない。もし彼らの真の大部分の間に想像される希望があるとすれば、それは「平和」だ

けであろう。平和と共に南ベトナムないし全ベトナムに招来されるべき政治体制がどのようなものでなければならぬと主張するのは、ベトナム人のごく少数部分と、それより自己に有利な政治体制がそこにあるべきだとする外部の大国だけにすぎない。（大森実監修『泥と炎のインドシナ』）

ここには、「南ベトナムの大部分の人々はベトナム問題の解決について、何らの意見も、希望ももっていない」こと、また「希望があるとすれば、それは「平和」だけ」であること、そして政治体制を主張するのは「ベトナム人のごく少数部分」と「外部の大国」だけにすぎないことなどが記されています。つまり、ここであげたルポや雑誌記事などから垣間見えるベトナムの「農民」は、いわゆるイデオロギーや思想などよりも、生活から戦争に参加せざるをえない存在であり、大部分の人びとは生活のために少数の「上」や大国という「外」の主張に基づくルールに従うか（政府軍側につくか）、あるいは背くか（解放民族戦線側につくか）しかない存在ということになるのです。

実際、ベトナム戦争をめぐる言説は、取り巻く状況の複雑さから幾つかのレベルのどの部分を焦点化して語られるかによって変わってきます。例えば、先にもふれた『文芸』九月増刊号掲載のベ平連徹夜ティーチ・インの記録では、ベトナム戦争の危険性と国際的見通しについて、基調をつくるという役割で自民党の宮沢喜一が報告しています。宮沢は、アメリカは善意で自由と独立のためのつもりで介入したがこじれていること、アメリカとソ連とは共存できるが中国共産党は共産主義輸出という信念を捨ててい

ないため共存できないなどを主張し、アメリカから国連に委ねるという意見が出ているが中共と北ベトナムが拒否している——中国はこの時点で国連に加盟していません——とし、問題は北京とハノイにあると述べています。これに対し、マルクス経済学派で当時は大学で教鞭をとっていた長洲一二は、「基本の姿勢をごまかすために、現実の複雑さを利用してはいかん」と述べた上で、「ヴェトナムのことはヴェトナムにまかせ」るために米軍を批判する態度が必要だといえます。それに対し中曾根康弘は、長洲の意見を「感情に訴えた」ものと批判し、第一に「全局的平和を維持する」ことを考えねばならないと述べます。彼は考えるべき五つのポイントをあげていくのですが、その最後にあげられているのが「ヴェトナム人の立場」です。

第五にいちばん重要に考えなければいけないのは、つまりヴェトナム人の立場だろうと思います。具体的にいつて、おそらく私がヴェトナム人だったら、ちょうど広島の人みたいに、共産党とかいろいろな連中がきて、原水爆禁止だ禁止だとわあわあ騒いでいる。うるさいから出て行ってくれ、おれたちだけで、静かに広島島の原爆の日を迎えさせてくれ、そういう気持が、ヴェトナム人にあるいはあるのではないかとそういう気もしますよ。(拍手)そういう面も一面考えつつ、全局的な立場でこの問題をとらえなければいけない。あの十七度線というものは、たとえば朝鮮の三十八度線、あるいはベルリンの東西のラインに、やはり通じているものです。(「8・15記念徹夜討論集会(ティーチ・イン)

戦争と平和を考える 第一部(討論) ヴェトナム問題と日本の進むべき道」『文芸』九月増刊号)

ここで興味深いのは、「ヴェトナム人の立場」を考えねばならないとする中曾根が、その立場を広島の人びとに喩えていることです。川口隆行は、一九六三年の原水爆運動分裂を背景に原水禁の(政治性)に親しいものとして原民喜や大田洋子の作品が忌避された一方で「国民の共通体験を表象した文学」として「黒い雨」が受容されたと指摘していますが(『原爆文学という問題領域』前掲)、まさにここでは原水禁の(政治性)と広島の人びとの(非政治性)になぞらえるかたちで、「ヴェトナム人」の(非政治性)が語られているのです。

このような「ヴェトナム人」表象によって語られるベトナム戦争が、特別な思想を持たずに「お上」の起こした戦争に苦しんだ人びと、即ち重松等に代表される「庶民」の戦争体験に重ねて受け止められた可能性は否定できません。例えば、『文芸』九月号掲載の「8・15記念徹夜討論集会(ティーチ・イン)」戦争と平和を考える」の第二部は「(体験談) 戦中戦後をふりかえる」となっており、そこには「現在のヴェトナムの国民がちょうどあの戦時中のわれわれの姿、敵に追われ、食うものもない、あすの命の希望もなにもない、死んだほうが楽だという現実」に直面していると思うという報告や、「昔の日本のように国民皆兵が叫ばれ、考える事を忘れ又は許されず、闘ったと同じような事をくり返しているのではないか」という投書(「徹夜討論集会を視聴して」本田幹子『文芸』9月増刊号)、そして「戦争はやめてくれと叫ぶの

は、けっしてこれは政党・政治に関係することじゃないのです。ほんとうに私たちのような苦しみを味わうのは、私たちだけでもうおしまいにしていたきたい」という言葉などが報告されています。このように見ていくならば、一九六五年の時点で、自らの戦争体験と今のベトナムの戦争を重ねる反戦言説がバターンの一つとして成立していたと考えられるでしょう。そして冷戦構造を前提とするこの言説では、政治的イデオロギーとは無関係な人びととその苦しみ、即ち「上」に翻弄されつつ、ただ「平和」を願う人びとというイメージとその苦しみへの共感的同情が示されていくのです。こうした言説状況の中、上下の断絶と「上」の〈政治〉に振りまわされる「庶民」という構図で戦争や原爆の悲惨さを描いた『黒い雨』は、まさに当時の反戦言説に沿うものだったと考えられるでしょう。しかし一方でこの作品は、そうした言説の枠組みに沿うがゆえに、〈非政治的〉で〈無力〉な人びとの受難としての戦争や被爆というイメージと記憶の編成に寄与してしまっただけといえるのかもしれない。

四、〈去勢された家長〉の物語

最後にもう一度『黒い雨』に戻りたいと思います。『黒い雨』の「庶民」の〈非政治性〉や〈無力さ〉に注目するならば、それを支える一要素として〈家長〉の物語という枠組みが機能しているといえそうです。例えば、先行研究でも指摘されているように、被爆後の広島市内を歩き続ける場面の重松は、妻や矢須子の先に立ち、周囲を見渡して判断をくだしたり指示を出したりと、どう

しようもできない大状況の中で家族を守るべく長としての役割を引き受けています。また戦後の小畠村の暮らしの中でも矢須子の結婚に責任を感じつつ、心配し手を打とうとするなど、やはり家長的役割を担おうとしますが、しかしそれは彼女の被爆症状の発現によって妨げられてしまいます。『黒い雨』に描かれた戦争は敗戦という形で終結し、重松ら家族は、再び儀式や慣習、風習を守りながら静かに過ごすことのできる日常を取り戻すはずだったのですが——つまり戦争がなければ彼の一家は何も困ることなく暮らすことのできる階級だったことがここに示されています——、しかし日常は復元し得ないものでした。重松の被爆症状ももちろんですが、まさに作中で生じる矢須子の発病は、日常の復元を妨げる原爆というものの脅威の二重性を印象づけるものとして描かれているのです。

ここに至って重松は〈去勢された家長〉として描かれることになります。例えば、「原爆病」の症状が出始めた矢須子は重松夫婦になかなか打ちあけず、打ちあけてからも「重松を煙たがっているよう」であり、また相談もなく隣村の病院に入院してしまいます。「これが世間に知れたら、重松夫妻は原爆病の養女が重体になったのに、まだ放ったらかして置いたと曲解される」と重松が世間の目を気にするほどに、矢須子は、家長としての重松の管理から逸脱した行動をとるのです。重松やシゲ子に寄り添う語りが大半を占めるこのテキストでは、矢須子の心情は推測でしか語られず、読者が読みを投影できる空白として残されているのですが、ただここで留意したいのは、彼女の行動は、重松の家長としての遂行を妨げるかたちでテキストに現れるということです。つ

まり戦後の彼は家長としての能力を削がれた存在として、即ち（去勢された家長）として描かれているのです。

そして注目すべきは、この（去勢）をめぐるもう一つの物語が、重松が書き続けた「被爆日記」の末尾の場面、玉音放送で敗戦を知る場面にもうかがえることです。その日、重松は「恐るべき重大事が言葉によって発せられ」と知りつつ、ラジオのある食堂に行かず、裏庭で過ごします。そしてラジオが終わった頃に食堂へ行き、工員たちが泣いたり険しい表情を見せたりしているのを目にして「涙が込み上げ」るのですが、その涙の意味は次のように説明されます。

僕の涙はもう引込んでいたが、正直なところ、それは今月今日正午すぎの涙として正統派に属するものであったとは云われまい。僕は幼いとき近所で遊んでいて、要市という背の高い半は白痴の無法者によくいじめられた。それでも、その場で泣くのは我慢して家に逃げ帰り、お袋にねだって拵げた胸元から出してもらった乳房を見ると同時に泣きだすのであった。いまだに乳の味が鹹っぱかったのを覚えている。ほっとした瞬間の涙であるが、今日の涙もそれと同じ種類のものではなかったかと思う。

重松は、自身の涙を「ほっとした瞬間」のものと説明しますが、注目したいのは比喩の方です。ここでは、いじめられて帰宅し母親の乳房で泣くという、いわば口唇期への退行体験が持ちだされて説明されます。つまりこれまで家長として、あるいは工場長に

近い立場にある者として振る舞ってきた重松の敗戦への感情は、いじめっ子から逃れた後の母子密着による安心感に喩えられているのです。これは「戦争」や「被爆」など、「下」の者にはどうすることもできない事態から逃れ得たことへの安堵と解釈できるでしょう。つまり彼が感じた母子密着の安心感、は、「上」の権力の崩壊という、まさに（家長）の（去勢）によってもたらされていたのです。

もう少し詳しく見ていくことにしましょう。前述の通り、重松は玉音放送のラジオを聞かずに裏庭に向かっています。そこで彼は用水溝の綺麗な流れやそれを「いそいそと遡って」いく鰻の子の群に気づくのですが、これはよく指摘されるように、敗戦に直面した人間と生命力をもつ自然とを対比した場面といえるでしょう。ここで留意したいのは、この日記が重松の視点で書かれているために、そして彼がラジオを聞きに行かないために、玉音放送をめぐる描写が直接にはなされないという点です。重松は伝聞で知った内容を断片的にしか語り得ず、しかも放送を聞いた者によると天皇の言葉は「ラジオの調子が悪く」て「はつきり聞こえ」なかったといえます（ただし「後日記」として刷物で見た詔勅の一部が引用されています）。そのため、ラジオを聞いた一人が今後も戦うように告げていたと言いだし、他の数人がこれを否定する意見を出したことで敗戦という結論に落ち着くわけですが、ここに書き込まれているのは最高位にある天皇から「恐るべき重大事が言葉によって発せられ」たにも関わらず、その言葉が下の者たちに伝わらないという事態です。既にその前日の記述には、八月六日以来、軍人は従来のように威張っていいかどうか自分で判断がつか

なくなつたとあり、上下の秩序が崩れてきていることが述べられています。こうした「上」の力が損なわれることの象徴として、伝わらない玉音放送があるのだとすれば、ここにはまさに〈去勢された家長〉としての天皇が描かれているともいえるのです。

そして最も留意すべきは、語りの順序と出来事の順序が一致しないこのテキストでは、〈敗戦〉を契機とするかたちで重松と天皇がともに〈去勢された家長〉として立ち現れるということです。

ここに潜んでいるのは、戦争／敗戦による〈去勢〉という枠組みの中で、戦時に断絶していた「上」と「下」を接続し、「天皇」と重松ら「庶民」とを一体のものとして提示するレトリックに外なりません。つまりこのテキストは、全能感を削がれた体験で一体化し得る〈去勢されたわれわれ〉なるものを「天皇」と「庶民」を含むかたちで立ち上げてしまうのです。このような〈われわれ〉の一体感をもたらすものとしての〈敗戦〉が、母子密着による安全で満たされた瞬間のイメージに重ねられたとしても決して不思議なことではありません。

そして『黒い雨』に散りばめられた、先人から引き継ぐものとしての習慣や風習、共同体主義への依拠は、こうした一体化し得る〈われわれ〉をあたかも歴史的な存在であるかのように浮かび上がらせます。実際、このテキストには戦前戦時における帝国の拡張やそれに伴う人びとの移動の痕跡などがあまり書き込まれておらず、むしろ重松の小島村の生活のように、戦前の風習や共同体を復すべきものとして語るといって、重松ら「庶民」を固定

的かつ歴史的な存在として描く傾向にあるといえるでしょう。重松が日記を書き始める契機となった矢須子の破談は一九五〇年六月のことであり、日記を書き始めた時期は朝鮮戦争開戦期に重なっているはずなのですが、滝口明祥が指摘しているように、それに対する記述はまったく見られません（『井伏鱒二と「ちぐはぐ」な近代』新曜社、二〇一二年）。またGHQの占領下にあったこともふれられていません。つまり『黒い雨』は、戦前からの境界の移動やそれに伴う人びとの動き、国際情勢の変化や体制の再編、それに対する人びとの反応など、作品の舞台となった時期に見られたいはずのものをことごとく捨象し、戦争／敗戦による〈去勢〉を共有体験とすることで、戦前戦後を貫く共同体としての〈われわれ〉なるものを立ち上げてしまうような面を有しているのです。

この『黒い雨』の連載が始まった一九六五年は、アメリカの東アジア戦略の下で日韓条約が締結され、日本の植民地責任が一層曖昧になった年でもあります。そのような時期に反戦言説との親和性をもちつつ、一方で政治的社会的現実を捨象することで、固定的かつ歴史的な存在としての〈われわれ〉なるものを「天皇」を含むかたちで立ち上げた『黒い雨』を、どのように位置づけることができるでしょうか。再考すべき重要な課題と考えています。

付記 本稿は当日の質疑応答を踏まえて加筆修正したものです。ご教

示くださった方々に感謝申し上げます。